

子育ては親育て



福圓真一

旭化成(株)
[299-0297] 袖ヶ浦市中袖5-1
係長, 博士(理学).
専門は有機合成.
fukuen.sb@om.asahi-kasei.co.jp
<https://www.asahi-kasei.com/jp/>

私は2014年の入社以来、樹脂の開発者として働いてきた。大きな異動もなく、かれこれ9年ほど経ったが、プライベートでは2017年に第一子、2018年に第二子、2020年には第三子が生まれ、生活スタイルや働き方は大きく変化した。ただただ仕事と育児に追われる日々であったが、本執筆を通じて、自身の仕事と私事を振り返りたいと思う。

まず働き方についてだが、2人目の子供が生まれた2018年に仕事への取り組み方が大きく変わった記憶がある。私は実験が好きなので自分で手を動かしながら進めたい性格であり、それまでは実験→解析→計画の一連のサイクルを「自分でやったほうが早い」と考えがちであった。しかし、年子の姉妹の育児をしながら、やればやるだけ検討項目が増える開発業務をこなすことは当然難しく、モチベーションも下がりつつあった。この状況を変えるため、当時取り組んでいたプロジェクトメンバーへ子育てでも大事にしたい自分の考え方をオープンにし、個人の成果よりもチームの成果を重視する考え方に切り替えた。私の場合、限られた工数を効率的に使うため、できないことはチームに謙虚に頼り、チームのために自分は何を優先して検討すべきか、何か得意なことで貢献できないか……というギブ&テイクの視点を重視して業務に取り組んだ。個人で150%の力で仕事に取り組むよりも、肩の力を抜いてチームと協力して進めることで学び得られたことも多かった。また、自分に余裕があってこそ、良いアイデアを生み出せると感じる。このように、子育て中に業務調整を行いながら働けることは、チームの理解があって初めて成り立つ。理解ある上司やチームメンバーには大変感謝している。

その後、2020年に第三子が生まれた際には、次女もまだ1歳3カ月であったため2カ月程度の育休を取得した。この頃の子育てと言えば、楽しいことばかりではなかった。子供達の気まぐれに振り回され、時には反射的に激怒して泣かせてしまうなど……まさに「もうお手上げ」という状態が続いていた。子育てに悩み、

自己嫌悪に陥った時期でもあったが、育休を取得したおかげで時間的な余裕があったため、子供との接し方を夫婦で夜な夜な話し合い、より良い方法を模索できた。「育児休業」=同じ場所で妻と長く一緒に過ごす初めての期間(次は退職後?)でもあり、子育てのことを改めて話し合う機会だけでなく、お互いを理解し合う貴重な経験となった。

さて、これまでの子育て経験の中から、完璧にはできていないが、私なりに大事にしていることを改めて考えた。おもに二つある。①子育ては思いどおりにならないことばかり、自分で変えられないことには悩まない。②環境や仕組みを整え、子供が挑戦しやすいよう工夫する。これらの考え方は、対象はもちろん異なるが仕事でも大いに役立っていると感じる。子供との関係マネジメントは、組織の中で部下との関係マネジメントで必要とする考え方と似ており、少なからず活かすことができる。たとえば、職場環境を整えることにより、部下が安全・健康に仕事ができるように工夫すること。そして、部下それぞれの各自のアイデアを大切に、失敗を恐れずにインパクトのある仕事を行える仕組みが何かを考え、挑戦をサポートすることだ。

以上のように、自分なりになんとか仕事と育児が両立できる環境を整えてきた。帰宅時間を早くし、小さい0~2歳ごろにそばにいられたおかげか、今でも自分1人で寝かしつけできるような娘達との距離感であることを嬉しく感じる。また、自分が育児休業を取得して以来、周りの部署で1カ月以上の育児休業を取得する男性社員が増え、育休相談を受ける機会も増えた。ある社員からは、「前例を作ってくれたので取りやすい雰囲気になった。」と言われた、とても嬉しかった。ある程度子供が大きくなったら今度は私が子育て中の部下・チームメンバーを支えてあげたい。そして、自身も父親として、上司としてさらに成長し続けたい。最後に、私が工作中、圧倒的に大変な思いをしながら三姉妹のお世話をしてくれている妻に感謝し、本稿を締めたいと思う。